資料２－２

Ⅰ 日本で国際園芸博覧会を開催する意義

《地球規模の環境変化》
- 地球温暖化
- 災害への脆弱性
- 途上国における人口増加
- 許容量を超えた自然資源利用
- 生態系サービスの減少
- 生物多様性の喪失

《国内の環境・社会情勢の変化》
- 人口減少の進展
- 急速な高齢化・長寿命化
- 自然災害の激甚化・頻発化
- インフラの老朽化
- 中山間地域の農地の荒廃等

《技術革新と経済のグローバル化》
- IoT、AI 等の新技術の進展
- 遺伝子レベルでの技術進展
- 経済のグローバル化
- 地球規模での人的交流の活発化

大阪・関西万博（2025）
テーマ：いのち輝く未来社会のデザイン
・国連が掲げるSDGsが達成された社会
・国家戦略であるSocity5.0の実現

連携

横浜国際園芸博覧会 2027

2050年をも視野に入れたバックキャストによる博覧会の検討

Society5.0の推進
- ◆ 未来投資戦略2018（2018）
- ◆ 第5期科学技術基本計画(2016)

◆ AI、IOTなどの先端的技術を取り入れ、都市・地域の社会課題解決　等

グリーンインフラの実装
- ◆ グリーンインフラ推進戦略（2019）
- ◆ ガーデンツーリズム登録制度(2019)

◆ 自然環境の有する多様な機能を活用した持続可能な都市づくり　等

花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化
- ◆ 花きの振興に関する法律（2014）
  国際園芸博覧会等の開催の推進を位置付け

◆ 持続可能な農業・食品産業に関する研究開発推進、次世代国産花き産業の確立　等

観光立国や地方創生の推進
- ◆ 明日の日本を支える観光ビジョン(2016)
- ◆ 観光立国推進基本計画(2017)

◆ エコツーリズム、アドベンチャーツーリズム、 全国へのアクセスポイント　等

- 政策実現とその主流化の場として、国際園芸博覧会を国が関与して開催する意義
- アジア・モンスーン地域で開催される園芸博覧会として、日本の里山に代表される「環境とともに生きる」知恵を世界に提示
- Eco-DRR等による災害の克服、環境に対する複合的な取り組み等、SDGsを達成するモデルを構築
- 科学技術の進化と人間性の調和、自然資本財の持続性確保、新たな産業・政策の創出と展開
- AIPHが掲げる、人々と企業が繁栄する活気ある都市の創造における植物の役割を促進する「グリーン・シティ・イニシアティブ」の推進

SDGsの実現に向けた日本モデルの提示（2030）
― 2030年を年限とするSDGs達成による目指す社会 ―

その先の社会へ（2050）
「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現への貢献
博覧会レガシーの継承

上瀬谷通信施設返還（2015）
横浜市瀬谷区の旧米軍通信施設約240haが日本政府に返還

園芸博覧会の意義・成果を、区域全体でレガシーとして継承し、国内外に発信

国際園芸博覧会の概要

- 19世紀に欧州で発展した園芸展示会が、国際園芸博覧会へと発展した。当時から、**「コンテスト」が本質的なコンテンツの一つ**となっており、主要催事となっている。
- 国際園芸博覧会は、**国際園芸家協会（AIPH)の承認**により開催され、**BIE（国際博覧会協会）の認定**により、政府が関係して開催する国際博覧会として位置付けられる。
- 当初は園芸産業振興が主眼であったが、現在は**園芸産業振興とともに、博覧会を契機としたまちづくりや社会課題への貢献が展開**されている。

EXPO'90
1990年に大阪市の鶴見緑地が会場となったアジアで最初の国際園芸博覧会となった国際花と緑の博覧会

国際園芸博覧会の潮流

【1948】AIPH 設立

■欧州諸国開催。園芸産業振興が主眼
- 1960 フロリアード・ロッテルダム(オランダ)
- 1963 IGA・ハンブルグ(ドイツ)

■アジア、中東諸国での開催に拡大
- 1990 国際花と緑の博覧会「大阪花の万博」

■博覧会を契機としたまちづくりや社会課題への貢献に展開
- 2012 フロリアード・フェンロー(オランダ)
- 2016 アンタルヤ国際園芸博覧会(トルコ)
- 2019 北京国際園芸博覧会(中国)
- 2021 ドーハ国際園芸博覧会 (カタール)
- 2022 フロリアード・アルメーレ (オランダ)
- 2024 ウッチ国際園芸博覧会(ポーランド)

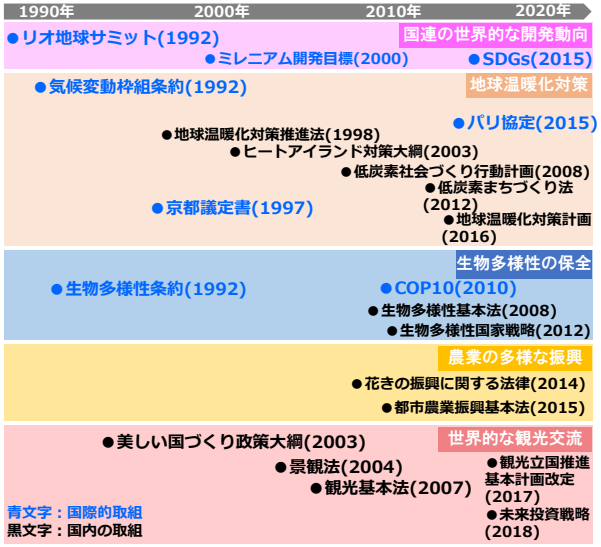
○社会の健康と福祉、環境の向上、および経済の強化をはかるための植物利用の促進
○社会における園芸（商品・技術）の必要性と、人々と自然や環境とのつながりにおける役割を明確化
○世界の最高水準の知識と最先端の技術を推進し、文化と園芸の多様性を深める
○園芸のプロフェッショナルとして生産性と国際協力の促進

国際園芸博覧会の開催の成功に向けた取組と役割
（AIPH規則より、2015/10/21開催総会にて承認）

国際園芸博覧会を巡る状況

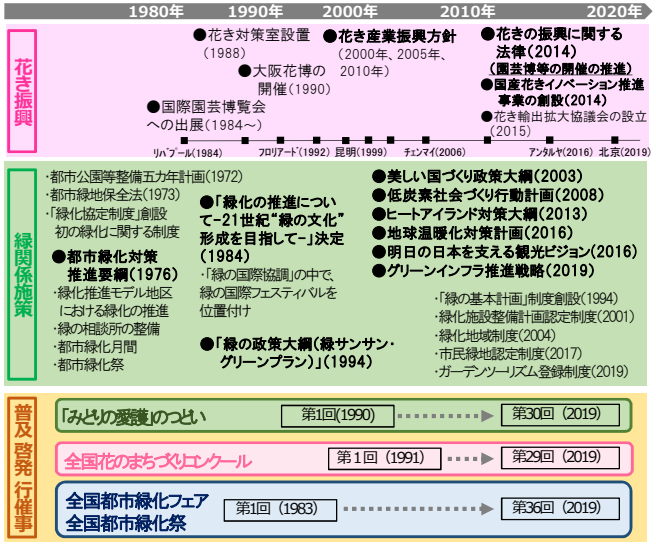
◆花・緑・環境をとりまく国際的な潮流と日本の取組

- 近年、世界的に、地球温暖化、生物多様性の保全、農業の多様な振興、観光交流等に関する多様な取組が展開されている。



◆日本の花きの振興及び緑関係政策の変遷

- 普及・啓発に向けた行催事は、大阪花の万博を契機に発展。
- 社会情勢の変化に対応した緑の機能を活かす政策に展開。
- 花き振興法により、国等が博覧会開催等に努めることが規定された。



Ⅱ　横浜市における国際園芸博覧会の計画（案）について

基本的事項

■開催場所
旧上瀬谷通信施設

■開催期間
2027年3月～9月
（6か月間）

■会場規模
80～100haを想定

■入場者規模
1500万人以上を想定

■開催組織
国が認定する法人等

■開催事業費
会場運営費
320～360億円程度
会場建設費
190～240億円程度
関連公共事業費
600億円程度

基本構想案及びテーマについて

■テーマ

テーマの意図：日本・横浜が創る明日の豊かさを深める環境社会
- 花や緑、農による価値の今日的効果を国際園芸博覧会という参加体験による実証の場を通して世界に問いかける
- 新たな価値観・産業領域の創出等とあいまって、国際的な課題の解決や未来社会の展望に新しい視点を与え、進展に大きく寄与
- グリーンインフラがもたらす風景や新たな価値は、豊かさの質を深める持続可能な未来の環境社会にも新たな価値をもたらす

今後の方向

「幸せを創る明日の風景」は、SDGsがもたらす豊かさの質を深める社会を、風景を通して具現化するものであり、花と緑を主題に先端技術も活用する園芸博覧会の特性を十分に発揮するものである。さらに、上瀬谷において、世界の国、企業、人々の参画による国際園芸博覧会を通して、平和で持続可能な人類の将来と日本の貢献を示すものであり、意義があると考えられる。

国際園芸博覧会を開催するための基盤について

■地域整備の方向性

《旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（素案）の骨子》
- 地区の特性や市の上位計画等を踏まえ、まちづくりのテーマと方針を設定
- 博覧会後の土地利用にあたっては、地区全体でレガシーを継承・発展

テーマ　郊外部の新たな活性化拠点の形成
～みらいまで広げるヒト・モノ・コトの行き交うまち～

【方針１】多様な交流による、賑わいと活気のあるまち
【方針２】活力ある都市農業と緑をいかした魅力あるまち
【方針３】将来にわたり、安全安心で、利便性の高いまち

《旧上瀬谷通信施設の土地利用と国際園芸博覧会の関係（イメージ）》

《国際園芸博覧会の会場確保の考え方》
- 土地区画整理事業を活用して国有地を集約すること等により、博覧会閉会後に都市公園となる区域を含む80～100haを確保
- 土地区画整理事業及び都市公園事業により基盤整備

＜土地利用ゾーン＞

：博覧会会場の想定区域

■輸送計画

経路・手続きを分散させる輸送計画

：博覧会会場の想定区域

今後の方向

周辺道路の交通容量、地域の環境への影響を考慮し、交通需要の分散化、交通手段の最適化を図るとともに、期間中の来場者の計画的分散、来場前後の適切な情報提供等について引き続き検討すべきである。
また博覧会後の地域内外のまちづくりにおいても、そのレガシーを、環境共生のガイドライン等を通して継承し、国内外に発信していくことが求められる。

事業展開等について

■基本的考え方

自然資源の大量消費やエネルギーの浪費などに支えられた
これまで「豊かさの量的拡大を求める社会」
「人と自然との関わり」や「環境保全と経済発展のバランス」に着目
SDGsの達成　Society5.0の実現
目指す社会「豊かさの質を深める社会」

■国際園芸博覧会を通して目指す「豊かさの質を深める社会」
- 自然と共生した環境負荷の少ない持続可能な社会
- 花・緑・農などの自然が身近にあふれた美しく安全な社会
- 分かち合いとつながりのある、心豊かで健やかな社会

国際園芸博覧会では、

SDGsの達成やSociety5.0の実現をはじめ、さらにその先の社会（2050年）に向け、**バックキャストの視点を持って、グリーンインフラの多様な機能を活かし、課題解決の方法や社会のあり方などを提案**する。

＋

「**豊かさの質を深めて幸せを創る**」ための**行動**をすべての人が「開催までのプロセスを含め、自ら主体的に取り組むべき自分ごと(ジブンゴト)」として認識し、**自らの行動を変え、さらに社会の仕組みを変える契機**とする。

「幸せを創る明日の風景」を通して、このような社会像を具現化

■事業コンセプト（シーン展開の方向性）

「豊かさの質を深めて幸せを創る」ための行動を主体的に行う**人、企業、コミュニティを増やす**とともに、**課題を解決**し、**社会のあり方を変える**ために、風景を構成する要素である**「空間・時間」「知恵・技術・仕組」「人の活動と交流」**に着目し、様々なコトやモノを実証・実践するシーン(コンテンツ)を展開

空間・時間

風景・景観のリデザイン　～花・緑・農・大地を活かした美しく安全な都市や空間のモデルを提示～
グリーンインフラ、次世代都市モデル、多様な園芸文化・庭園文化　等

知恵・技術・仕組

環境共生社会へのチャレンジ　～最先端技術と伝統の知恵を活かした持続可能な社会への更なる挑戦～
ゼロカーボン、食ロスゼロ、再生可能エネルギー、スマート農業　等

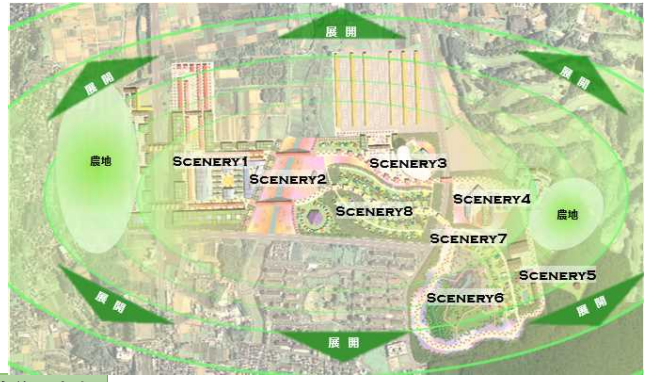
人の活動と交流

つながりがもたらすイノベーション　～交流を通じた感動・いやし・安心と、共生のムーブメント創出～
技術と芸術の融合、多様な食、コミュニティの再構築、友好平和・多文化共生　等

■会場構成

《会場展開の考え方（イメージ）》

会場全体にグリーンインフラの持つ多様な機能を取り入れ、環境と共生した祝祭の場とするとともに、日本庭園の技法により日本らしさを表現。
土地・地形、水系、緑地、施設、活動等といった多様な要素を重ね合わせることで生まれる様々な景（Scenery）において、様々なシーン(コンテンツ)を展開し、来場者に多くの出会い、感動、五感による体験、学びを提供できるよう会場を形成。会場外の農地との連携等、周辺地域へ展開。



SCENERY 1 自然の機能をいかした知恵と技術	SCENERY 5 温故知新・日本の園芸文化と庭園文化
SCENERY 2 豊かな緑の中でのアウトドアライフ	SCENERY 6 環境と調和したガーデン＆アート
SCENERY 3 多文化交流の祝祭ステージ	SCENERY 7 日本ガーデンツーリズム探訪
SCENERY 4 新たなライフスタイル	SCENERY 8 世界のガーデンショウケース

今後の方向

上瀬谷の特性を活かしつつ、地球規模の課題への対応、園芸文化の発信、農の発展等の視点に留意し、引き続き具体化の検討が求められる。なお、準備段階を活用した戦略的な情報発信、自律的な市民参画、コミュニティ醸成等とあわせて、技術革新等の社会情勢への柔軟な対応も必要である。

博覧会の実現に向け、環境との共生に加え、次世代の産業創出や経済成長、観光立国や地方創生等の観点も踏まえ、事業展開の具体化、実施組織の設立、参加国の招致、機運の醸成等について、幅広い意見をふまえながら連携して進めていくことが必要である。